

國久真有／咲くやこの花インタビューvol.35

國久真有(くにひさ・まゆ)【令和4年度美術部門[現代美術]】



令和4年度「咲くやこの花賞」《美術》部門は、現代美術家の國久真有さんが受賞しました。「その作風は、かつて大阪・中之島に活動拠点を置いた「具体美術協会」の作家たちによる「芸術の身体性」を想起させ、大阪の匂いを纏っているようにも感じられる」と評された國久さん。曰く「自分の体が筆のようなもの」。キャンバスに向かう身体と気の持ちようなどについて、お聞きしました。

取材・文／岩本和子

「自分に対してまっすぐの線を描くということ」

「咲くやこの花賞」、ご受賞おめでとうございます。

ありがとうございます。「咲くやこの花賞」はやなぎみわさんや、ヤノベケンジさんなど、様々な方が受賞されている賞なので知っていたのですが、私がそんな賞に…？とびっくりしました。私は大阪出身ですが、神戸にいたり、イギリスにいたりして、なかなか大阪のアートと関わる事が少なくて、2、3年前に大阪にアトリエを移動してこの賞をいただき、生まれたところで賞をもらえて嬉しいなと思いました。

「ご自身の体を軸にストロークと遠心力を利用して弧を描く手法」という國久さんの絵の手法ですが、こちらは、いつ、どういうきっかけで始められたのでしょうか。

2014年の秋ぐらいからですね。無心の状態で描くということをすごく考えていたことがありまして。なんで人の絵画作品を見たときに「いい」と思うのかとか。きれいとか、美しいとか、いろんな感覚があると思うのですが、なんでそう思われる絵ができるのかなとか。そういったことを考えて、子供の絵のような、無邪気であったり、無垢であったり、そういう絵を大人ができないかなと思ったんですね。そのうち自分に対してまっすぐの線を描くという答えが出たというか。でも、曲線はたまたまだったのですが…。具体美術協会の作家がやっていたアクションペインティングも、無垢の絵に入ると思って。自分の意志や思いをキャンバスに表さないと言いますか。

贈呈理由にも具体美術協会の名前が挙がっていましたね。

具体美術協会はすごく尊敬していて。神戸の大学に通っているときにすごく詳しくなって、堀尾貞治さんや白髪一雄さん、元永定正さんにサインをいただいたこともありました。田中敦子さんには、実際にお会いしてみたかったです。具体展を見に行ったら後は、「(具体に)入りたかったな。絵画の熱い話をしたかったな」と思いました。あと、彼らが大事にしていたことと、私が大事にしていたことに、似ているところがあるんじゃないかと思っていて。堀尾さんがずっと芦屋市立美術博物館で子供の絵を審査していたというお話を聞いたこともあって、見ているものとか、場所とかが、すごく似ているのかなと思っています。だから、私がすごい大人になったときとか、いなくなったあとでも、私の絵を見たときに具体のことも何か感じてもらえたらいいなという思いはあります。



國久さんは4.5畳という大きなキャンバスもあれば、小さいキャンバスもあります。キャンバスの大きさの違いで、絵に対する意識の違いもあるのでしょうか。

(自分の腕をいわばコンパスのようにして絵を描くことから)結局、円の大きさは変わらないので、キャンバスのサイズを変えることで、その絵がどう見えていくか、ということをして。「自分は変わらないけど、環境を変えていく」みたいな。それで、どのサイズが一番、自分にとっての

絵なのか探していた時期に、2m×3mという大きさにたどり着きました。私が描く円の直径は180cmか190cmぐらいなのですが、2m×3mにしたら4方向から円を描いても真ん中にクシュッと重ならない、すーっと抜けるような空間ができ上がって。その空間があることで自分の作品が気持ち良く見えたので、これを基準のサイズにしよう。

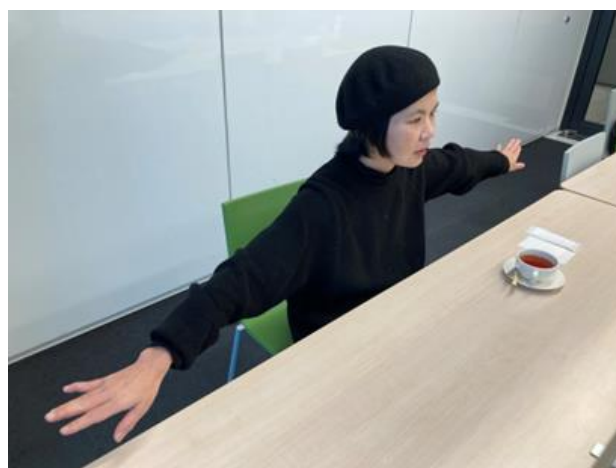
キャンバスに手が届かないところがあっても構わないと。

それもすごく悩んだのですが、「これはわからないからみんなで考えよう」みたいな感じにして、とりあえず発表して。そしたら、いろんな人から「空間が見える」とか「神の領域だ」とか、自分の手が届かないところを見せているから「身体性が見える」とか言ってもらって。「描いていない場所を描くために描く」みたいなことが起きて。いろんなこと考える作品になったなと思っています。

面白いですね。それを小さく切り取ることによって、身体の一部がクローズアップされるというか。キャンバスが小さくなればなるほど、國久さんの細胞を見ているような感覚になりますね。

まさにそうです。キャンバスを切ることに限らず、1年以上悩んで。やっぱり身体を使って描いているので…。完成したものを切るの？と考えたり。でも、そうではなくて、いわゆるスマホで画像をズームアップするようなイメージで切り取って、それだけを提示しようと。そうすることで、「他の線を想像することができる」という作品になっています。これはあまり話さないことなのですが、この円の絵を描くようになる前に全身輸血をしていて。それだけに自分の血みたいな気持ちで描いているところが多くて。引っぱりなく、流れるようなイメージが今の絵にもびったりで。だからこそ、力を入れなくても描けるというのもあります。

「腕を伸ばすことで、楽に生きられる方法を見つけた」



大きなキャンバスの真ん中に現れる空白地帯。「空間」は國久さんの作品のキーワードですね。そこにあるのかないのか、みたいな。

あるのかないのかというのは、「生きているとは」みたいな話になってきて。どういうことが「生きている」というのか。時間なのか、空間なのか、どういうふうにしたら実感がわくのかっていうのはありますね。空間も、「生きているとは」という問いもそうですが、大事なことは、「美しい」ということを確認できるのは人間の特権やなと思っていて。それが自分にとっては大事なことだと思っています。

確かにそうですね。

やっぱり絵を描いてるものやから、自分が筆代わりですよ、本当に。自分に染み付いたものが出てくるというか。素直な線を描いているので。何も考えないで描いているということは、ペンディングの特徴としても直接の線がお客さんに見えちゃうんですよ。それもあって、普段から変なものを見ないようにしています。

ツイッターに2008年頃の絵を上げていらっしゃいましたよね。その絵に丸いモチーフがあったので、今のスタイルはその頃からあったのかなと思ったのですが、お話を聞くと違うようですね。

今の絵と、前に描いていた絵は、いろんな方法が違っていて。腕を広げるのは偶然なんです。腕を広げると(胸が広がって)息がしやすくなるんですよ。体操みたいな感じで。これは大発見でした(笑)。あと、絵って下を向いて描くことが多いと思いますが、それでいい絵ができることもありますが、私は苦しかった。腕を広げることで「私はどこかにいるよ」みたいな(笑)。

心を開く感じですか？

そうですね、ちょっと楽に生きられる方法を見つけたという感じはします。

國久さんの活動で気になっていたことがありまして。毎月第2土曜日に新潟で「夕陽会」というものを開催されていますよね。

夕陽会は、2021年の夏に新潟のゆいぽーと(新潟市芸術創造村・国際青少年センター)に(アーティスト・イン・)レジデンスに行っていたのですが、そこで見た夕陽がきれいすぎて。ほとんど毎日、夕陽を撮って、週3回、“とってだし”みたいな感じで撮った夕陽をプロジェクターで映して、「ここよかったよね」とか話すような、「今日の夕陽を振り返る会」をやっていたんですよ。そうすると、近所の人に来て、なんとはなしにしゃべり出すんですよ、みんな。何でもないことを。それに共感してくれた新潟のミュージシャンとかと、レジデンスの最終日にセッションして。私が映像で夕陽を流して、ライブでも夕陽を撮りに行ったりして。それが今でも続いていて。とりあえずの形としては即興バンドとして、夕陽をプロジェクターで映すということをしています。

なるほど。そういうことだったんですね。

1年ぐらいは不定期でやっていたのですが、2023年から日にちが固定されて。2023年1月

から毎月第2土曜日に新潟のコミュニティスペースみたいなところ——1階がカフェで、2階がワーキングスペースみたいなところで、「夕陽会」をやらせてもらっていて、私も行けるときは行っています。

「“なんだ、これは”と思われるようなことができれば」



今後、展示してみたい場所がありますか？

サハラ砂漠で展示したいですね。砂漠の真ん中に大きい絵がドーンってあったら面白いかなって思って(笑)。広い砂漠に、人間のサイズの線を描いた絵をポンポンポンって置いたら、「私達はちっちゃい…！」ってなるのかなって。リチャード・セラという彫刻家も1回、どこかの砂漠でやっていたんですよ。私もどこかの砂漠に(自分の作品を)置いてみたいです。

自然でいうと、2019年に「六甲ミーツ・アート」に参加されて、山中に作品を置かれましたね。

そのときもギャラリーの白い壁とは違って、自然には負けるということと、そんな自然とコラボしている面白さというか、カッコよさが見えてきて。より大きいところに置いてみたいと思ったんです。私は最初、石とかに描いていたような人間なので、「自然と人間」みたいな、自然には敵わないけど、美術をやるのは人間の特権みたいなところがあるので、中に置いたり、外に置いたりしたら面白いなと思いました。



「六甲ミーツ・アート」では、公開制作もされていましたね。

公開制作は「第22回TARO賞」の受賞後に川崎市岡本太郎美術館でやっていて。それがきっかけで「六甲ミーツ・アート」に誘われて、3ヶ月ぐらい山荘に泊まってやりました。その時はずっと野外に作品を置いているので、作っていくプロセスも見せていて。同じお客さんも何回か来てくれて。時期的にも新緑から紅葉に変わっていくから、同じ線を描いているけど、どんどん色が変わっていった。六甲で見た光とか、空とか、風とかを取り入れた作品を3点描いたのですが、途中、いろんな色になりながらも、最終的には夜景と空と光の絵で完成しました。そのとき、インスタグラマーの方たちに本当に助けられて。インスタにたくさん載せてくれたことで、いろいろと広がっていきました。

大阪では野外設置や公開制作など、何かお考えですか？

外に作品を置くようなことは大阪ではやったことがないので、大阪でやるとしたら街中がいいなと思っています。オフィスの人が見て、「なんだ、これは」って、「これ、人が描いたんだ」って思われるようなことができればいいですね。アートって、集団になじめなかったような人たちがやっているところもあると思うので、街中で作品を見たときに救われる人たちがいると思うんですよね。「エンターテインメントだー！」って「わー！」って盛り上がると、いじいじしている人はそういうところに行きづらい感じがあって。イギリスとかは美術館もひらけていて、自分も行きやすいなと思ったので、何かそういうことができればと思います。

アートって一見、「特別なもの」という印象がありますが、よくよく目を凝らせば街中にもたくさんありますね。

抽象絵画というだけでシャッターを閉じる方もいますが(笑)、公開制作をすることによって、「私も描けそう」とか、「やってみたい」と興味を持ってもらえる。そのきっかけとして見てもらったらいいかなと思っていて。線だけでこんな絵になるんやみたい。ワークショップをしても、絵を描けない子でも描けて、描く楽しさが伝わる。そこがいいところかなと思っています。

「これはなんだ」というものに対してつい正解を求めるところがあつて。わからなかったらだめだみたいな、そういう自分の思い込みを捨てて、わからないものはわからない、それでいいと思えたら、より楽しめそうです。

今すぐ答えを出さなくてもいいと思うんです。いつか、ふとつながるときが来るかもしれない。私も建築やファッションの勉強をして、それから絵を描いて、ふと「あ、最初(の建築)につながった」と思うことがあつて、ちょっと感動したことがありました。わからないけど、ずっと絵を描いていたんですよね。「楽しいことは何だ？」という感じで、手を動かして。年齢と共にいろんなことがそぎ落とされて、自分が興味のあることだけが残ったときに、「これだったんだ！」とつながって。



いろんなもので埋もれていたけど、実はつながっていた。

そうですね、まあ「無駄なことはなかった」じゃないけど、つながってよかった〜と、ほっとした気持ちになりましたね。

今後の活動で、目指していることや、目標を教えてください。

いろんな場所で公開制作をやったり、いろんな人の話を聞いたりしたいですね。夕陽と一緒に、絵も毎日、同じことを繰り返しているし、線だって誰でも描けるもので。絵を描いているというより、自分に対しての真っすぐの線を描いて。そういう当たり前のことをいろいろと場所を変えてやって、いろんな人と会えればなと思っています。

では最後に共通のご質問を。國久さんが「咲くやこの花賞」を贈りたいと思う大阪市の好きなところを教えてください。

多いなあ…。多いですけど…自転車がすごい好きで、自転車でウロウロできる街っていうところは好きかなと思いますね。市内はどこでもシャーって行けるところがいいです。

